



2 地域の特徴



長崎市とその周辺

(1) 長崎市

長崎市の古い町並みは、小高い山々に囲まれ、長崎港を取りまくように広がっている。人口の増加や自動車の普及、道路の整備などにより、住宅地が市の周辺へ広がり、現在の長崎市を形づくっている。2005（平成17）年1月には、長崎市と香焼町、伊王島町、高島町、三和町、野母崎町、外海町が合

併し、さらに2006（平成18）年1月には、長崎市と琴海町が合併して、新しい長崎市が誕生した。

ア 県都「長崎市」

人口388,490人（令和6年10月）の長崎市は、県庁所在地として、県の行政、経済、文化などの中心となっている。官公庁、銀行、会社や商店などが集まり、また、美術館や博物館、総合体育館など県や市の公共施設も多い。また長崎港周辺地区では、2000（平成12）年に創設された「環長崎港地域アーバンデザイン会議」の専門家からのアドバイスを受けて、美しい都市景観の創造に務めている。



県庁舎と非常時に災害救援活動の場となる防災緑地

（提供：県都市政策課）

MEMO

みんなで考えてみよう！

長崎市にはどのような特色があるのだろうか？

MEMO

イ 造船と水産の町

長崎港の西岸には、三菱重工業長崎造船所の大型ドックや工場が並んでいる。長崎造船所の歴史は日本で最も古く、これまでに建造した船の数は、約2,000隻（令和4年10月現在）におよび、世界最高レベルの造船所である。近年では、造船部門に比べて発電設備を中心とする機械部門の生産の割合が大きくなった。香焼の大島造船所や浪の平から戸町の海岸沿いにみられる造船所もふくめ、造船業は長崎市や周辺の町の経済を左右する重要な産業である。

一方、長崎港は東シナ海的好漁場を近くにひかえ、長崎魚市場はわが国有数の水揚げを誇ってきた。しかし、その敷地がせまくなったので、三重地区の海岸をうめ立て、近代的な設備を備えた新漁港を建設した。今では、周辺に水産加工場も集まり、一つの大きな水産基地となっている。

ウ 異国情緒あふれる観光都市

長崎市は、多くの史跡と美しい景観にめぐまれ、観光は重要な産業となっている。大浦天主堂や崇福寺をはじめ、グラバー園、眼鏡橋、平和公園などへは県内外から多くの観光客がおとずれる。長崎くんちやランタンフェスティバルなどの年中行事やチャンポン、カステラなどの食べ物は、異国情緒あふれるものとして特に人気がある。



国宝大浦天主堂（提供：長崎県観光連盟）
（写真掲載に当たっては大司教区の許可をいただいています）

(2) 西海市・長与町・時津町

西海市は、西彼杵半島の北部にあり、平成17年4月1日に西彼町、西海町、大島町、崎戸町、大瀬戸町の5町が合併して誕生した人口24,268人（令和6年10月）の市である。西海町中浦にある七ツ釜鍾乳洞は県内で唯一の鍾乳洞であり、1936（昭和11）年に国の天然記念物に指定された。近くには、南蛮船来航地として有名な横瀬浦や天正遣欧使節の一員であった中浦ジュリアン出生の地などの県指定文化財があり、歴史豊かなまちである。



中浦ジュリアン像（提供：長崎県観光連盟）

MEMO

長与町, 時津町はともに長崎市に隣接した町であり, 長崎市のベッドタウンとして人口が著しく増加した。長与町の人口は 38,965 人(令和 6 年 10 月), 時津町の人口は 28,968 人(令和 6 年 10 月)であり, 両町の人口密度は長崎県内の他市町よりも著しく高い。

(3) 諫早市・大村市

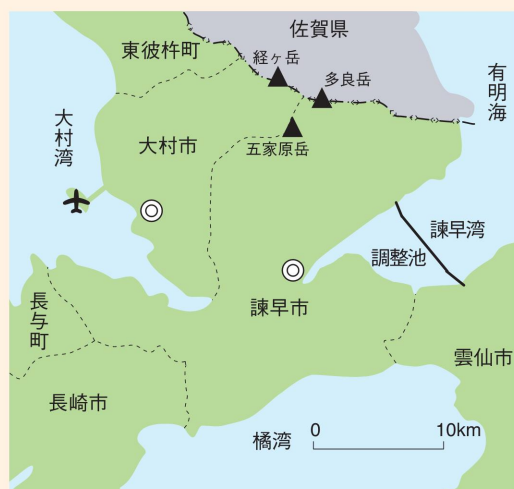
ア 多良山系のふもとに広がる地域

有明海^{ありあけかい}, 大村湾に向かってゆるやかなすそ野をもつ多良山系^{たらさんけい}のふもとに広がるのが, 諫早市と大村市であり, 両市の人口は, 諫早市 131,231 人(令和 6 年 10 月), 大村市 97,634 人(令和 6 年 10 月)を数える。

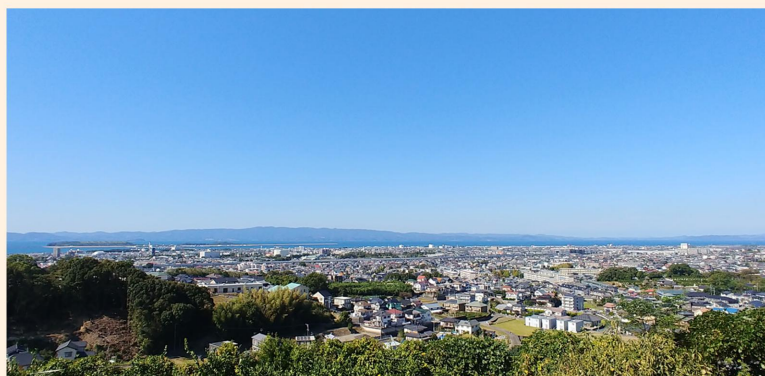
諫早市は, 戦国時代には西郷氏^{さいごう}, 江戸時代には諫早氏^{はんきよち}の本拠地^{ほんきよち}として本明川^{ほんみょうがわ}沿いに発展してきたまちである。干拓^{かんたく}によって広がった諫早平野は, 県内有数の米どころである。

大村市は, 大村藩^{はん}の城下町として発展してきた。豊かな平野にめ

ぐまれ, 北部には郡川^{こおり}によって形成された扇状地^{せんじょうち}があり, 畑作の適地としてにんじんやいちごなどの生産が盛んである。



諫早・大村市とその周辺



大村市街

(撮影:県義務教育課)

みんなで考えてみよう!

諫早・大村市にはどのような特色があるのだろうか?

MEMO

みんなで考えてみよう!

諫早湾の干拓事業について調べてみよう。

イ 古い開発の歴史

諫早湾は、干満の差が約6mもあり、ガタ土が厚く堆積し干潮時には広大な干潟が広がる地域であった。干潮時には干潟が一望できるため、1330年ごろから干拓の適地として知られていた。ガタ土の多くは、阿蘇山の火山灰が有明海に流れ込み、有明海を左回りに流れている潮流にのって、諫早湾に堆積しているものであり、厚いところでは40m、平均でも20mになる。ガタ土は1年間に約5cm、100年間では5mも堆積すると言われており、これにより河口が塞がり、河川の水が海に排出されにくくなることで、諫早湾岸の低平地はたびたび洪水被害に見舞われた。

一方、干潮時に大きく干潟が広がる地形は干拓の適地であり、昔から盛んに干拓が行われた。河口を塞ぐ干潟を干拓することで、新たな河口を確保するとともに、諫早湾岸で約3,500haもの農地が造成され、今では諫早平野と呼ばれる長崎県第一の穀倉地帯が形作られている。

諫早湾の大規模干拓構想は、1952（昭和27）年に、戦後の食糧難を解決すること等を目的として「長崎大干拓構想」が、1970（昭和45）年には「長崎県南部総合計画」が検討された。その後、長崎大水害（昭和57年）の経験を踏まえ、防災面を重視する計画とし、1997（平成9）年に潮受堤防が締切られ、1999（平成11）年には潮受堤防が完成し、現在では、高潮や洪水などに対する防災機能が十分に発揮されている。干拓事業は2008（平成20）年に完了し、約700haもの広大で平坦な優良農地が造成された。また、潮受け堤防と干拓地の間には約2,600haの調整池ができ、干拓地の水源になるとともに、新たな水辺環境が創出された。



床上浸水の被害のようす

大規模営農のようす（大型機械による収穫）
（提供：県諫早湾干拓課）

ウ 新しく発展する地域

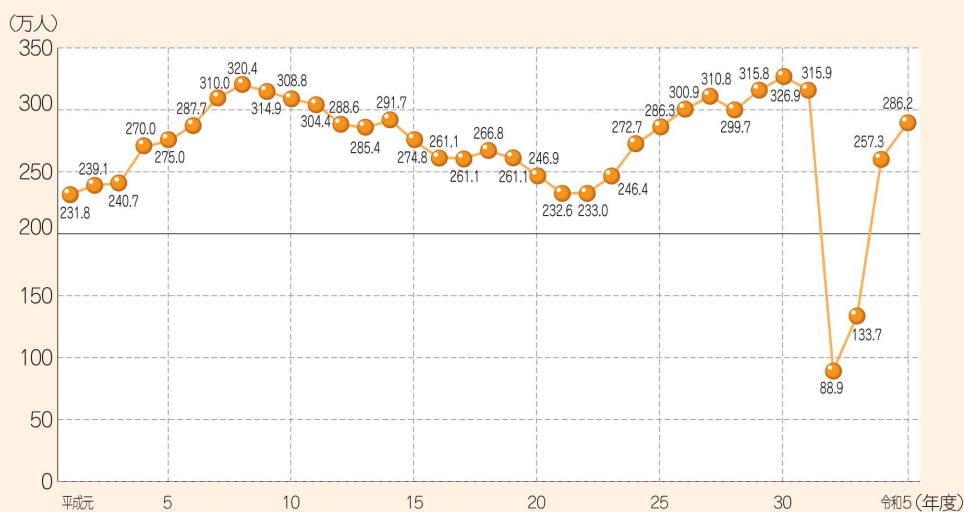
九州は「シリコンアイランド」とも呼ばれ、^{せんたん き}IC産業などの先端技術産業が多く立地している。長崎県でも昭和50年代にIC工場の立地がはじまり、ソニーセミコンダクタ（旧ソニー長崎・諫早市）、サムコテクシブ（旧コマツ電子金属・大村市）などの大きな企業^{き ぎょう}が進出するなど、今では、諫早中核工業団地^{ちゅうかく}、大村ハイテクパークが両市の工業の中心地となっている。諫早・大村両市は、①空港や高速道路に近く、交通の便がよい。②豊富な水や労働力にめぐまれ、IC産業の立地条件として最適である。特に、諫早中核工業団地には、昭和50年代から、ICを中心とした工場が進出し、諫早市の工業を大きく発展させた。現在では、長崎市につぐ製造品出荷額をあげている。

一方、大村市にある長崎空港では、1994（平成6）年8月に長崎国際航空貨物ターミナルが営業を開始した。諫早・大村両市は、古くから交通の要所^{ようしょ}として栄えてきた地域であり、今後^{しゅう じ ろ}も諫早市は「陸の十字路」として、大村市は「空の玄関^{げんかん}口^{ぐち}」として、その役割はますます重要となる。



長崎空港

（提供：県交通政策課）



長崎空港の利用者数の推移（長崎県交通政策課調べ）

MEMO

みんなで考えてみよう！

IC産業が諫早・大村に多く立地しているのはなぜだろう？

みんなで考えてみよう！

令和2年度に、長崎空港の利用客数が大きく減少しているのはなぜだろう？

MEMO

エ 諫早市と合併した地域のように

2005（平成17）年3月には、諫早市と西彼杵郡の多良見町と北高来郡の森山町、飯盛町、高来町、小長井町が合併し、新しい諫早市が誕生した。

諫早市の東部に位置する森山町には、緑豊かな景観にあう木造住宅や下水道が整い、国内最大級の瓦ぶき平屋建ての木造図書館がある。この諫早市立森山図書館は、県のまちづくり景観資産に登録され、地元で親しまれている。南部の飯盛町では、田結港が整備され、漁港と隣接して人工海水浴場も建設された。町民いこいの森で知られている東部に位置する高来町には、林野庁から「水源の森百選」に、環境省から「名水百選」に選定されている轟溪流がある。多良岳は、国の天然記念物のシャクナゲが自生し、自然の宝庫となっている。また、小長井町では、山茶花高原を中心とした観光レクリエーション施設にハーブ園も加わり、観光と結びつけた農業が考えられている。西部の多良見町は、みかんの生産が有名である。また、長崎空港を眼下に望む自然豊かな公園や展示回廊、ホール等を備えた図書館があり、多くの市民が集まる場となっている。



まちづくり景観資産に登録されている諫早市立森山図書館

（提供：県都市政策課）

※まちづくり景観資産とは、個性的で魅力ある景観を形成しているまちなみや建造物として県に登録したもの。